

ここでもんまにクズみたいな社会人生活を送った

らほんまにクズやなと思っ

語り手 高橋悠（高校五期生 経営者） 聞き手 木村圭都

*

「本質」と現在

—じゃあ始めます。

はい、お願いします。

—まず、今どんなお仕事をされているのか教えてもらってもいいですか。

難しい質問やな。ちょっとややこしくなるので、簡単に言うと二つの会社を経営しています。一個は自分が代表の会社です。もう一個は副社長として入っています。自分の会社は事業を作って組織を束ねたりとか、そういうコンサルティング業務のような仕事をしてます。その一環で実は教育部門で、高校を作ったりとかしてました。

—そんなことができるんですね。

できるのよ。

—なんでそれをしようと思ったんですか。

なんだろうな。人をサポートすることが好きなんだよね。どっちかというと、自分がすごいサービスを作って、社会にインパクトを与えたいというよりかは、そういう人のことをサポートすることが好き。そんな思いを持って、頑張っている人たちの組織の中に入って、その組織とかサービスをより大きくするみたいなのが得意。

—人をまとめる上でサポートもしていきたいということですね。

そうそう。

—人をまとめるにはどういうことが必要なんですか。

これは難しいね。人をまとめるっていうことが、実はね、すごい得意なんですよ。すごい得意なんですけど、いろんな大切なことがあるんだけど、ぎゅっと凝縮して一つにまとめると、相手目線を常に考えられるかどうかかな。

—客観的にってことですか。

そう。人間ってやっぱり自分本位になっちゃうよね。自分がこれしたいとか楽しみたいって思うんだけど、相手が今どんな気持ちなのかとか、もっと楽しく仕事ができるためにはどうすればいいとかを常に考えて行動していくとチームはまとまる。

—それが大切なんですね。ではサッカーをしていたとお聞きしたのですが、サッカー部ではどういう立場だったんですか。

これね、今と全然違うのよ。サッカー部ではキャプテンでも副キャプテンでもなくて、一人笑いをとるやつがいたんやけど、その笑いをとるやつといつも自分含めた二人が常にふざけてるみたいな感じ。チームを笑かすみたいな。チームをいい雰囲気にするみたいな。そういう担当。—なるほど。おちゃらけタイプって感じで、まとめるってことはあんまりなかったんですね。

なかったね。むしろ自分がふざけすぎて、吉田貴彦先生にめっちゃ怒られるとか。目付けられてた、ずっと。

—あそうなんですか。でも今では人をまとめる側になったのはどうしてですか。

やっぱりさっき言った本質が生きるといふか。高校の時もおちゃらけタイプでふざけてたけど、常に自分が楽しむというよりかは、みんな

が楽しめるようにみんなを笑かしたいとか、ずっとそっちのことを考えてたんだよね。そっちのことばかり考えてたら社会人になった時に、みんなの気持ちがあつちやわかるみたいな。何考えてるかわかるし、どうやったら喜ぶかわかるし。みたいな状態になつてたから、自然となんかリーダーになつたつて感じたな。リーダーになりたいと思つてリーダーになつたわけじゃなくて、自然とみんながリーダーにしてくれたつていうのが正しい。

—もともとそういう才能があつたつてことですかね。

—どうなんやろね。今も才能あるとは思つてないけどね。難しいよね。

*

学生時代

—文化祭でバンドをしてたとお聞きしているんですけど、それをやろうと思つたきっかけつて何ですか。

—確か三年生の時にやつたんだと思うんだけど、七人で。まあでも一回しかないやん。仮にそこに出て失敗したら笑ひ者にされる可能性もあるやん。で、前に出るつてことはすごい準備していかないとけないやん。そういうのも結構だるいし、失敗する怖さもあるんやけど、でも失敗しようが、何しようが人生で最後の高校生活。この文化祭で前に出て、何にもこれまでやつたことがないやつが出るなんて、しかも立守の文化祭つてめっちゃでかいし、他校の子とかも来るやん。こんなにも過酷で恥ずかしくて、全員の前で目立つてることないなと思つてやつたかな。

—後のことは考えずにチャレンジした感じですか。

—そうそう。まあでも自分が歌めつちや得意やつて昔から。歌うつていうことに関してはすごく自信があつたから、そういうのをちよつとやつ

てみようかなつて感じかな。

—あ、ボーカルやつたんですね。

—あ、そうそう。

—えーすごい。やつぱり緊張しましたか。

—めつちや。だつて高校生でそんなことないやん。しかも保護者も含め何人くらいいてたんな。五百人ほどいてたんなあ。あの自分で言うのもあれなんやけど、当時はその三年生やつて後輩の一・二年生と中学生含めて結構人気があつたんよ。だからそういう子らもみんな集まつてきて、前の方に二列ぐらい女の子もみんな集まつてみたいな感じだめつちや緊張した。

—成功しましたか。

—いやそれがめつちや練習して完璧つてなる前々日に熱出して、前日三八度ぐらいまで上がつて、で当日喉潰れた。だからサビとかも全然声出えへんくて、一番最初のAメロBメロだけ歌おうみたいな。

—その日、休もうとかは思わなかつたんですか。

—その時、女の子二人と出て、ピアノと女性ボーカルと男性ボーカルのユニットやつたんよね。自分が休んだらヤバイよね。

—確かにヤバイですね(笑)。何の曲を歌つたんですか。

—一個はアラジンやつた。三曲ぐらいやつたかな。それで失敗したから、今もあるのか分からないけど卒業ライブつていうのがあつて、立守の卒業ライブにもう一回出た。

—それは成功しましたか。

—それは成功した、ちゃんと。

—えーすごい。チャレンジする場面つていろいろあると思うんですけど、バンド以外にしたこととかありましたか。

やってた。なんかいろいろやったね。全然出てこないけど、こういうプロジェクト（聞き書き二〇年史）とかもあるやんか。こういうのは基本的に手挙げてた。あとは体育祭とかもやってたな。目玉のリレーとか出たり、文化祭の登壇もやった。演劇の主役じゃないけど、ちゃんとセリフを覚えて、衣装を着てちゃんとやった。

―やりたがりって感じだったんですね。

そうそうそう。やりたがりやった。マジでやりたがりやったけど、やってた理由は一貫してここでやらなかったら後悔するなみたいな感じやった。ここでやらなかったらこの先もたぶんやらのやるなみたいな、そういうのに立候補するのって、めっちゃ頑張るやんみたいな。意識高いつていうか、めっちゃそういうことちゃんとやるやんみたいな、そういう雰囲気出るやん。

―充実感みたいな感じですかね。

そういう雰囲気。だからこそラッキーやと思ってたの。みんながやらない時こそやりたいみたいな。もったいないと思うね。結構その時の経験とか生きてるからね。

―それはどんな感じで生きてますか。

やっぱ前出て歌う時もそうだけど、普通やらんやん。だから普通やらないようなことも社会人になってからもあるので、みんなの前で喋るとかスピーチするとかもそうやし、自分がやったことのないことを誰かやってくれる人いませんかみたいなシーンも結構社会人になってくると出てくるやん。やけどやったことのないことをやるってことは、手を挙げてやるってことは失敗した時にみんなにバカにされる可能性があるやん。ほら失敗したーみたいな。そういうことも何も気にせず手を挙げるようになったりとか、誰かがやってないことをやるっていうのが大

事。特にやっぱ高校生みたいな思春期であんまり前に出れない時こそやった方がいいと思う。

―やっぱりそういう経験は大人になっても多いんですね。

めっちゃ多い。大人になってからの方が多い。自分で戦略を考えてその戦略を発表するとか、誰にも何も言われてないけどやった方がいいなと思って自分で考えてやるとか、高校の時にそういうのに慣れといった方がいいなと思う。

*

サッカー部で得た糧

―サッカー部であったことについてもう少し詳しく聞かせていただいてもいいですか。

さっき言ったみたいに、ちよつと一番チームの中で悪目立ちしてたところもあったのね。でもそれって別にみんなを楽しませたいみたいな気持ちも中にはあるみたいな感じでしたけど、やっぱり一番怒られてたし一番悪目立ちしてたから、みんなから結構『クズ』呼ばわりされてたんだよ。当時は別に何も思わなかったんよ。悠っていう名前なんやけど、悠ってほんま『クズ』やなとか、悠ってほんま『素行悪いな』とかそういうことを結構言われることがあった。ただこれって別にいじめとかじゃなくていじられキャラって感じやった。いじられキャラやったけど、そういう『クズ』とか『素行悪いな』とか、家も全然裕福じゃなかったから貧乏とかそういうことを結構言葉として言われることが多かったけど、当時は別にそんなに嫌じゃなくて、大学入った時になんであんなに言われてたんやろうなとは思った。それが活力になってこのチームのメンバー、良い意味でこいつらよりも絶対に「良い社会人生活を送る」って思ってた。

―見返してやろうって感じですか。

見返すって意味じゃないんだけど、ここでほんまにクズみたいな社会人生活を送ったらほんまにクズやなと思って、あいつらが思ってる俺のイメージがそのままになっちゃうなと思ったからマジで良い社会人生活送ったろうと思って、動いて。

―今、いい社会人生活は送れているんですか。

めちゃくちゃ。みんなお前やっぱすごいなみたいな感じで最近久しぶりに会ったら言ってくるし、お前だけ当時から変わってたけどこっちの成功の方に行くとは思わなかったみたいなことはやっぱ言われる。そっちの方がいいよね。

―かっこいいですね。

*

社長として今

―社長さんになっていいこととあってありましたか。

いいことかー。まあ、縛られはしないよね。サラリーマンって九時から始まって夕方の六時に終わって、これが月曜日から金曜日まで続いてみたいなで、ずーっと繰り返しみたいなね。そうじゃなくて働かないといけない時は週七で永遠に働いてる時もあるし、ゆっくりできる時は週三ぐらい働いて平日に普通にゴルフ行ったりとか遊びに行ったりとか、自由。自分が休めば休むほどツケは回ってくるし、やればやるほど結果が出るかもしれないし、全部自分の裁量で判断できる。

―僕のイメージだと結構忙しい感じがするんですけど、遊んだりもできるんですか。

遊べたりも結構するよ。この犬と一緒によく遊んでる(笑)。

(愛犬を持ち上げる)

―かわいいですね(笑)。

でもどうだろうな。普通のサラリーマンよりかは遊べないかも。でも、普通のサラリーマンが経験できないことは経験できるよね。

―それはいいですね。

*

社会人の勉強

―サッカーは今もしてますか。

今もしてる。友達とすることもあるし、同じ会社の人とやることもあるし、あとは自分でちよつとしたチーム作ったりするから、そこで何人か集めてよくサッカーやってるかな。

―そういうことをする時間も結構作れるんですね。

余裕で。

―学生の頃と比べたらどうですか。

学生の方が忙しいんじゃない。学生ってだって朝から晩まで勉強して夜部活やもんね。七時、八時とかに部活終わるやん。強化部とかだったら家帰って飯食って寝る、でまた次の日って感じやもんね。土日でも部活やんな。学生の方が忙しい。自由みたいな話だけというと、社会人の方が自由じゃない。

―その自由の時間ですることってサッカー以外に何かありますか。

えー、勉強。勉強っていうか本読んでる。

―どういう本読んでるんですか。

(色んな本を画面に映しながら) いっぱい色々あるんやけどー。山ほどある。こういうのをひたすら読んでる。

―今のお仕事につながる本とかを結構読むんですね。

そうだね。

—そういう勉強って社会人になっても必要ですか。

めっちゃ。でも学生の時と違うのは、学生の時ってやっぱ決まってるやん、学ぶこと。社会人になれば嫌なことは学ばなくて、好きなことだけ学べるっていうのがデカい。自分はやっぱりマネージャーとか幹部とか組織のどうしてもリーダーシップを取って上に立つ人間なので、そっち側のことが載っているような本っていうのはすごい興味があるし、すごい勉強になるからただ読んで。そこに苦はないという感じがかな。

*

職場の雰囲気

—高橋さんの会社はどんな雰囲気なんですか。

バリ仲良い。みんなめっちゃ仲良いね。仲良いし普通に部活みたいな感じで、本気になってやってみて失敗しても熱くなってる泣いちやう子もいるぐらい。結構、本気でやろうとしてる子が多いかな。アットホームで、でもちゃんとしてる仲良しグループって感じ。俺の組織はもう本当に超アットホームで、全員がコミュニケーションをちゃんと取るんやけどゴールに向かってちゃんとやってるって感じ。ゴールからずれたことはやっちゃいけないっていうルールにしてる。

—高橋さんの組織内では年齢差とかはあったりしますか。

あるある。二〇代前半の子もいれば四〇代の人もいるし。そこでも仲良くできる。そういう人しかいないし、基本的にあだ名で〇〇さんとかって、基本的に普通にあだ名で呼ぶのをオッケーにしてるっていうか。

—高橋さんはなんて呼ばれてるんですか。

ゆうさん(笑)。下の名前で呼ばれてる。そんな偉くぶりたくなってるわけでもないし、偉いと思わないでほしいから。そっちの方が楽しいよ。

*

リーダーがすべきこと

—高橋さんは社長になっていろんな人と関わる中で怒ったりすることとかあるんですか。

感情的にそういうことをすることは全くないね。怒った方がいいなと思って判断して怒ることはある。その人のためになるように怒る。その人がやったことによつて周りに影響が出たときは、周りの人のために怒るとかそういうのはあるけど、感情に支配されるって一方的に怒鳴り回すみたいなことはない。でもネガティブな事象が大きいときとか、結構残念なことが起こった時はやっぱりどうしても自分で感情が乱れちゃう時もあるよね。でも最終的には絶対に分離して考えるようにする。奥さんとかはね、心許してるから出しちゃうけど、仕事場では絶対出さない。それがやっぱ人をまとめるのにも大切やね。だってさ、悲しいことがあるたびにさ、感情に振り回されてるリーダーについていきたいと思わないよな。感情をちゃんとコントロールできてたら、あんなことあったのにあの人めっちゃ冷静やんってなるよね。

—確かに。でもさっきの誰かのために怒ることで嫌われたりはしないんですか。

嫌われるし、怖いよね。怖いけど、怒った方がいいって思ってるってことは、ここで怒らないと、ここで意見を伝えないと自分のこうした方がいいっていうものを伝えないと、その人はそのままの人生を送っちゃうってことだよ。ここでこうしなきゃいけないっていうことを伝えないと、この人ってまだどこかで同じことやるんだろうなって思いながら見過ごすってことやん。そっちの方が無責任やなって思う。リーダーってそういうもんやと思う。そこが怒るチャンスっていうか、怒るべきタ

イミングやと思った時に怒るって感じ。それで嫌われて離れていったら仕方ないよね。自分がこうやった方がいいと思ってるのに嫌われるのが嫌やからっていう無責任な理由でやらない選択肢は自分は絶対しない。だからやっぱり人をまとめるのは自分のことよりも他人のことを考えることが大切ってことやな。

*

今振り返ってみると、多分ね、誰よりも色んなことにチャレンジしようとしてたかな。俺はちっちゃいことも大きいことも含めてどうしようかなって迷ったら難しい方を選んでた。なので、そういうのをぜひ意識しながら色んなことにチャレンジしてほしいなと思う。

—頑張ってみます。今日は長い時間ありがとうございました。
はい、ありがとうございます。

【感想】

今回の取材を通して、高橋さんがこの学校で積み重ねてこられた多様な体験が現在の社長という仕事に生かされていることを知り、自ら行動を起こすことの大切さを改めて強く感じました。また、リーダーとしての在り方のお話からは、周囲の人を心から大切に想い、熱意をもって接する姿勢に多くの学びを得ました。私自身も、高橋さんのように普段できかないような経験をできる限り積み重ね、将来へとしっかり生かしていきたいと思います。



上：語り手 高橋 悠さん

下：聞き手 木村圭都